

自由と孤独と歓びの物語 有馬みどりの不滅の里程標

山村雅治

今夜の<有馬みどり ピアノリサイタル「J.S.バッハ：平均律クラヴィア曲集第2巻」全曲>コンサートは、これまでの連続コンサートシリーズの集大成として開かれる。若いピアニストとしての大きな到達点を、彼女はかつて「リスト：超絶技巧練習曲 全曲」を全国3か所で弾ききることによって築いた。

1986年に開き2016年に閉じた芦屋の「山村サロン」で演奏を始めてから、彼女はもう一段と高い音楽の天空をめざして羽搏いていく。「ベートーヴェン ピアノソナタ連続演奏会」は私とともに一歩ずつ歩みを進めていった。まず物語のはじめから話を進めよう。

[1]

有馬みどりは中学卒業後いきなり単身でロシアに渡り、国立モスクワ音楽院附属中央音楽学校ピアノ科に入学。1995年同校修了。2002年オーストラリアのシドニーへ留学。2004、2005年ブルガリア国立ソフィア・フィルハーモニー主催のワークショップで最優秀演奏家に選出。2006年、松方音楽賞大賞受賞。彼女のピアノを初めて聴いたのは、その直後に知人に誘われて行ったコンサートだった。プロコフィエフ『ロミオとジュリエット』のピアノ連弾版の第2ピアノを弾いていたのを聴いて驚いた。第1ピアノよりも精彩があり、音色にリズムにいのちがあり、なによりも覇気に満ちていました。いずれ時が来れば「山村サロン」(芦屋に開いた小ホール 1986-2016) ソロを聴きたい、とそのときから思っていた。彼女の登場は、まずヴェセリン・パラシュケボフのヴァイオリンに合わせるピアノから。

前年に2011年のリサイタルはリスト『超絶技巧練習曲 全曲』を全国3か所で行った、これは日本女性ピアニストでは初めての快挙。大きな演奏会をなした後も、彼女はつねに「あたらしいこと」を学んでいった。

2012年9月16日にヴァイオリンのパラシュケボフ(ウィーン・フィルやケルン放響のコンサートマスターを歴任)と共演した「山村サロン」公演が実現した。

■ヴァイオリンとピアノの昼下がり 2012.9.16

ヴェセリン・パラシュケボフ(ヴァイオリン) 有馬みどり(ピアノ)

シューベルト：ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 第3番 ト短調 D.408

ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第5番 ヘ長調 Op.24

ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ 第3番 二短調 Op.108

チャイコフスキー：憂鬱なセレナーデ メロディーワルツ・スケルツォ

2度目は声楽と合わせる。ヴァイオリンも声楽も「歌」。ピアノを一人で奏でて「うたう」だけではない音楽の喜びを自分のものにしただろう。

■坂口裕子ソプラノ・リサイタル 2013.7.29 有馬みどり(ピアノ)

山田耕筰：赤とんぼ、野薔薇、風に寄せてうたへる春のうた

C.ドビュッシー：忘れられた小唄

I.ピッツェッティ：ペトラルカの3つのソネット

F.リスト：ペトラルカの3つのソネット

そして翌年。念願のソロ・リサイタルが開かれた。

■有馬みどり ピアノ・リサイタル 2013.11.23

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第11番 作品22 変ロ長調

ブラームス：4つのバラード 作品10

シューベルト：さすらい人幻想曲 作品15 D760 ハ長調

リスト『超絶技巧練習曲 全曲』を国内3か所で演奏したのは、たしかに「高い山」を征服した証だった。若いピアニストは、これからおとなのピアニストとして成熟していくために時間を使わなければならない。一生をかけて極めたいものは「音楽」だとしても、作曲家のどの人にもぶつかっていけないのか。集中してひとりの作曲家にぶつかっていくことは「人生」をまなぶことでもあっただろう。

リストの『超絶技巧練習曲』全曲を全国3か所で弾く壮挙を遂げたときの『ぶらあぼ』誌2011年10月号にインタビュー記事が掲載された。

ここには彼女の肉声がきこえる。「リストの世界をつきつめてみたい、との思いにとらわれていた。リストが持つ技巧と表現のすべてを描いた、極めてリストらしい個性を物語る」作品は、「人間の醜い部分や、弱い部分もありのままに受け入れるような、そんな懐の深さを感じ、不思議と私たちに近い存在とを感じる」ものだ。

また、『超絶技巧練習曲』Études d'exécution transcendante という「原題を直訳すれば『超越したもの、理性を越えたもの』との解釈が正しいようです。私自身、ある時期までは表面的にしか見ることができなかったのですが、勉強を深める中で、これまでに気づくことがなかった深く、豊かな世界が垣間見えるようになってきました」。

「この曲集はリストが15歳のときに書いた作品1として書かれた後も25年にわたって手が加えられいま知られているような形になりました。その間、当時の混沌としたヨーロッパの文学、絵画、詩、風景、そして愛…リストが触れた有形無形のあらゆるものが濾過されて、リストの言葉となりました。まずはリストを丸ごと咀嚼して体感したい…との思いから、この『超絶技巧練習曲』の取り上げることにしたのです」。

音楽に対するこの態度がたまらく好きだ。身につけた技巧を誇示することを目的とするのではなく、作曲家その人を作品を通して生きたい。この姿勢には共感を覚える以上に、すべての演奏家が有馬みどりを範とすればいいと思う。舞台に立てばさまざまな

誘いがあるだろう。暗い客席の視線は明るく照らされた舞台上で演奏する自分に集中される。俺を聴け。私を見なさい。そのような自己顕示への果てがなく終わりが無い欲望とは、有馬みどりは早くから別れている。子供のときからの厳しい研鑽とロシアでの孤独な少女時代は、いまもまちがいなく生きている。死ぬか生きるか、ぎりぎりのピアノを弾かなければならない。いったん鍵盤に立ち向かえば、自分の感性と技術をあらんかぎりに音楽に奉仕して、最終に立ちあがる大きな像は、演奏家その人ではなくて、そこにはいないけれども奏でられる音楽そのものを通じての作曲家でなければならない。

[2]

それから年を経て2015年の夏に有馬みどりから「ベートーヴェンのピアノソナタ全曲を連続演奏会で開きたい」と、あっと驚く企画を明かされ、その第1回は2016年2月28日に幕を開けた。

彼女は32曲あるソナタをどう分けて弾いていくかを熟考した。有馬みどりは番号順、年代順に演奏していくことを決めた。「山村サロン」は聴衆が多かろうが少なかろうが、いいと思ったら断行する場だった。だから現代音楽も積極的に推し進めてきたし、認められた演奏家にならばどんどん背中を押して舞台上に立ってもらってきた。200人までの小さなホールは実験の場であってもいっこうに差し支えなかったのだ。だからその意気やよし。初回のプログラムが「第1番」から「第4番」までの4曲で、ピアノ学習者ならともかく一般の音楽ファンには初めて聴く曲ばかりだったのではないか。

■有馬みどり ベートーヴェン連続演奏会 Vol. I 2016. 2.28

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第1番 へ短調 Op.2-1

：ピアノソナタ 第2番 イ長調 Op.2-2

：ピアノソナタ 第3番 ハ長調 Op.2-3

：ピアノソナタ 第4番 変ホ長調 Op.7

第4番の最終音が響き終わるやいなや、会場から熱い「ブラヴォー」の音が炸裂した。有馬みどりは、たたかいて勝ったのだ。たった一人に戻った音楽家の目で楽譜を読み、響きを探り大胆かつ細心に鳴らし、すでにして野人のベートーヴェンを余すところなく伝えていた。

この夜、ベートーヴェンのピアノソナタを作品順、番号順に進めていくことが生み出す途方もなく豊かに実る果実の山を思った。

■有馬みどり ベートーヴェン連続演奏会 Vol. II 2016.7.31

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第5番 ハ短調 Op.10-1

：ピアノソナタ 第6番 へ長調 Op.10-2

：ピアノソナタ 第7番 ニ長調 Op.10-3

：ピアノソナタ 第8番 ハ短調 Op.13「悲愴」

以下は当夜の感想を書き留めたもの。

<今日のサロンは有馬みどりさんのベートーヴェン。ソナタ連続演奏会の第2回で「5」「6」「7」、そして「8・悲愴」。以前にもまして、なおすばらしい演奏に聴き入った。

「5」の冒頭から、この日に賭けた気迫が伝わる。ス

コアを読みぬき、考えに考えての結論として、堂々たるテンポでリズムが踏みしめられた。特筆すべきは「6」の第1楽章で、松本氏の調律・調整もあいまって千変万化の音色の変化を楽しませてくれた。つまり、みどりさんは巧くもなった！ 大きなピアニストに化けることを、やがて別会場で中期・後期を弾かれるときには誰の耳にも明らかになるだろう。彼女の背中を押してよかった。われ知らず涙がこぼれたのは「8・悲愴」の冒頭の和音を聴いた瞬間だった。紛れもないベートーヴェンのハ短調の和音が決まった。その響きしかなかった！>。

2016年8月31日に「山村サロン」は閉館した。有馬みどりのベートーヴェンは場所を移して続行される。

■有馬みどり ベートーヴェン連続演奏会 Vol. III 2016.12.22

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第9番 ホ長調 作品14-1

：ピアノソナタ 第10番 ト長調 作品14-2

：ピアノソナタ 第11番 変ロ長調 作品22

：ピアノソナタ 第19番 ト短調 作品49-1

：ピアノソナタ 第20番 ト長調 作品49-2

当夜記した日記を採録する。

<今夜は西宮芸文小ホールで有馬みどりさんのベートーヴェン「ソナタ連続演奏会」の第3夜。第2夜までを山村サロンでやり、今夜はその続きを場所を移して。女性のドレスを脱ぎ捨て、黒いパンツスーツで舞台に出てきた彼女は、すでに外面を飾る虚飾からいっさい離れていた。ピアノは終始自信に満ちた響きで打鍵された。

第1曲「9番」の冒頭から自信に支えられて落ち着きがあり、すべての細部にわたって美しかった。膨大な練習量だったと思う。しかし苦闘は背後に隠され、みどりさんは鍵盤の上で自由だった。助走をつけて跳びあがる。そして天を滑空して美しい音色で虹を描く。

「10番」のリズムも語りも落ち着いたテンポで。弾き飛ばされる音符はひとつもなく、フレージングの始末が清潔だ。ソナチネ2曲も同じく、大きなソナタに肩を並べる作品として。「11番」では左手の強靭さが雄弁だった。走句が勢いがついて勝手にその低音に着地するかのよう。

全体を通じては、まず形式感が研ぎ澄まされた。曲の構造そのものが転調に伴う音色の変化とともに立ち上がってきた。舞台上上がるごとに、みどりさんは新しい姿を見せてくれる。当日プログラムには「山村雅治プロデュース」と文字が打たれていた。胸を張ろうと思う>。

以後はベートーヴェンの音楽も先人たちのピアノ技法を完全に習得し、さらにいよいよ偉大な個性が開花していく。有馬みどりのピアノもおなじように自信に充ちてかの自身がベートーヴェン自身に近づいていく。

[3]

■有馬みどり ベートーヴェン連続演奏会 Vol. IV 2017.9.7

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第12番 変イ長調

Op.26 「葬送」
：ピアノソナタ 第15番 ニ長調 Op.28
：ピアノソナタ 第13番 変ホ長調 Op.27-1
：ピアノソナタ 第14番 嬰ハ短調 Op.27-2 「月光」

■有馬みどり ベートーヴェン連続演奏会 Vol.V
2018.3.23

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第16番 ト長調 作品31-1
：ピアノソナタ 第17番 ニ短調 作品31-2 テンペスト』
：ピアノソナタ 第18番 変ホ長調 作品31-3
：ピアノソナタ 第21番 ハ長調 作品53 ワルトシュタイン』

■有馬みどり ベートーヴェン連続演奏会 Vol.VI
2018.9.22

『第22番 ヘ長調 作品54』『第23番 ヘ短調 作品57 熱情』『第24番 嬰ヘ長調 作品78 テレーゼ』『第25番 ト長調 作品79』、そして『第26番 変ホ長調 作品81a 告別』

■有馬みどり ベートーヴェン連続演奏会 Vol.VII
2019.6.28

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第27番 ホ短調 作品90
：第28番 イ長調 作品101
：第29番 変ロ長調 作品106「ハンマークラヴィーア』

■有馬みどり ベートーヴェン連続演奏会 Vol.VII
2019.12.27

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第30番 ホ長調 作品109
：ピアノソナタ 第31番 変イ長調 作品110
：ピアノソナタ 第32番 ハ短調 作品111

■Happy 250th Birthday, Dear Beethoven. 有馬みどり
ピアノリサイタル 2020.10.22

ベートーヴェン：7つのバガテル 作品33
：バガテル 作品126
：ディアベリ変奏曲 ハ長調 作品120

当夜の「Happy 250th Birthday, Dear Beethoven. 有馬みどり ピアノリサイタル」は、「有馬みどり ベートーヴェン全曲演奏会」の一環として開かれた。ピアノソナタが番号順に全曲演奏された足かけ4年の歳月を経て演奏されてきた。その歳月の歩みには、誰に知られなくてもひたすらに音楽の魂と技術を磨く「たったひとり」のピアニストの輝くばかりの足跡があった。

有馬みどりのベートーヴェン「ピアノソナタ」全曲演奏会は、2019年12月27日に全8回をもって結ばれることになった。あしかけ4年がかりの一步ずつの歩みは、ベートーヴェンがソナタ一曲ずつを創造した歩みと重なり、ほぼ曲順に進めてきた企画がピアニストの演奏の深化を伴って、かけがえのないものになった。それぞれが一回性の刹那に響いたものであるけれども、その響きは同時に永遠性を刻印され

ていた。それこそが音楽が芸術である証であって、有馬みどりはピアニストであると同時に逞しい芸術家へと脱皮を遂げてきた。

ベートーヴェンのソナタ全曲を演奏するにあたって、短い数日のうちに全曲をやるのは老熟のピアニストか、力だけがありあまった若いピアニストの冒険だろう。有馬みどりの全曲演奏会はいずれともちがう。老熟までにははるかに遠く、初見の若さからははるかに濃密な音楽の時間を踏みしめてきた。

そして2019年12月27日のVol.VIII。『第30番 ホ長調 作品109』、『第31番 変イ長調 作品110』、そして『第32番 ハ短調 作品111』。作品番号が連続した三つの連作ソナタには、ピアノソナタの集大成としての規模が大きくなった「29・ハンマークラヴィーア」後の止むことがなかった創意が溢れて、しかも力が脱けた造型のなかに人間界よりも宇宙の星々の輝きのなかに魂を解き放ちたい渴望を書いた。当時のピアノでは演奏できなかった楽器の現界さえをも超えた渴望だ。有馬みどりさんのピアノ演奏によってベートーヴェンの楽譜が現実のピアノの音として鳴り響いていくとき、頭のなかにはベートーヴェンの肉筆の楽譜がどの頁も浮かんできた。印刷物としての楽譜の譜読みはとっくに終えられていた。そこにあるのは、たっただいま流れてくる「書かれたばかりの」晩年のベートーヴェンその人の音楽だった。

[4]

■有馬みどり ピアノリサイタル 2021.9.30

J.S.バッハ：半音階的幻想曲とフーガ ニ短調 BWV 903
F.リスト：ペトルルカのソネット第104番 ホ長調《巡礼の年 第2年 イタリア》より
F.ショパン：夜想曲 第15番 ヘ短調 Op.55-1
夜想曲 第16番 変ホ長調 Op.55-2
舟歌 嬰ヘ長調 Op.60
J.ブラームス：ピアノソナタ 第3番 ヘ短調 Op.5

そして『リスト編 ベートーヴェン交響曲全曲』に取り組んでいくはずだった。しかし、ここでバッハ、リスト、ショパン、ブラームスのプログラムを挟んでおきたいとのこと。「リスト編 ベートーヴェン交響曲全曲」を弾き進めてみたけれど、「ベートーヴェン」そのものとはちがう。それはどうしてなのか。いちど立ち止まってかんがえる。それはバッハ以来の西洋近代の音楽全体の文脈をたしかめる作業だった。

■有馬みどり ピアノリサイタル 2022.12.17

バッハ「平均律クラヴィーア曲集 第1巻」

旅を経てバッハへもどる。鍵盤音楽の歴史は楽器の発達とともに進んできた。現代のグランドピアノとバッハの時代のチェンバロやクラヴィコードとは音量や響きの幅がちがひ、まったく別の楽器のようだ。現代のピアニストはそれでもグランドピアノでバッハを弾く。強弱指定、表情指定がない不愛想なバッハの楽譜から何を読み、何を表現しようとするのか。ア

ドルフ・ブッシュ (1891-1952) やパブロ・カザルス (1876-1973) が音盤の録音した「ブランデンブルク協奏曲」では通奏低音にチェンバロではなくピアノが使われていた。

古楽器に固執するのもひとつの立場だ。しかしバッハの音楽は、楽譜を追っていけば、そのままに楽器を弾いていけば時代を呼吸していた「生きている人間」バッハが「いま」に息づく。リズムはそれ自体の力で前へ進む。動機をつくるひとつひとつの音がそれ自体の色と表情を持っているから、弾いていけば豊かな音楽が息づいてくる。バッハを弾くには、なんの作為もいらない。

本日のプログラム

そして今日。待望のバッハ「平均律クラヴィーア曲集 第2巻」を聴く日が訪れた。

バッハ「平均律クラヴィーア曲集 第2巻」について

平均律クラヴィーア曲集 (Das Wohltemperirte Clavier) は、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ (Johann Sebastian Bach, 1685 - 1750) が作曲した鍵盤楽器のための作品集。

原題の"wohltemperierte"は、鍵盤楽器があらゆる調で演奏可能となるよう「良く調整された (well-tempered)」という意味であり、広い意味で転調自由な音律を指す。1巻と2巻があり、それぞれ24の全ての調による前奏曲とフーガで構成されている。

第1巻 (BWV 846~869) は1722年、第2巻 (BWV 870~893) は1742年に完成した。この間20年もの開きがあり、2巻は規模も大きくなった。

1. BWV 870 前奏曲 - 3声のフーガ ハ長調
2. BWV 871 前奏曲 - 4声のフーガ ハ短調
3. BWV 872 前奏曲 - 3声のフーガ 嬰ハ長調
4. BWV 873 前奏曲 - 3声のフーガ 嬰ハ短調
5. BWV 874 前奏曲 - 4声のフーガ ニ長調
6. BWV 875 前奏曲 - 3声のフーガ ニ短調
7. BWV 876 前奏曲 - 4声のフーガ 変ホ長調
8. BWV 877 前奏曲 - 4声のフーガ 嬰ニ短調
9. BWV 878 前奏曲 - 4声のフーガ ホ長調
10. BWV 879 前奏曲 - 3声のフーガ ホ短調
11. BWV 880 前奏曲 - 3声のフーガ ヘ長調
12. BWV 881 前奏曲 - 3声のフーガ ヘ短調

休憩 20分間

13. BWV 882 前奏曲 - 3声のフーガ 嬰ヘ長調
14. BWV 883 前奏曲 - 3声のフーガ 嬰ヘ短調
15. BWV 884 前奏曲 - 3声のフーガ ト長調
16. BWV 885 前奏曲 - 4声のフーガ ト短調
17. BWV 886 前奏曲 - 4声のフーガ 変イ長調
18. BWV 887 前奏曲 - 3声のフーガ 嬰ト短調
19. BWV 888 前奏曲 - 3声のフーガ イ長調
20. BWV 889 前奏曲 - 3声のフーガ イ短調
21. BWV 890 前奏曲 - 3声のフーガ 変ロ長調
22. BWV 891 前奏曲 - 4声のフーガ 変ロ短調

23. BWV 892 前奏曲 - 4声のフーガ ロ長調
24. BWV 893 前奏曲 - 3声のフーガ ロ短調

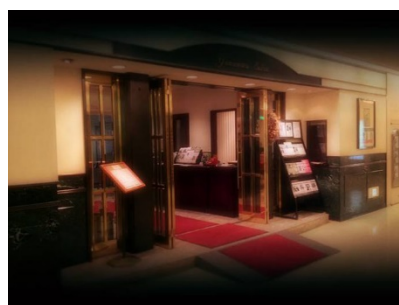
有馬みどりはこの演奏会に言葉を寄せている。

「革新性を持ち、全曲通して弾くことで見えてくる、多様なスタイルを飲み込みながら有機的で巨大な伽藍になるような第1巻に比べ、第2巻はもっと削ぎ落とされた、平易で、日常に宿る清らかで透き通るような慈しみと愛を感じる。バッハから私たちへの〜時に神への〜手紙を読むように、在るがままに全霊をこめて演奏できればと思います」。

J.S.バッハは作曲する時、楽譜の最初に「JJ」(Jesu Juva イエスよ、助けたまえ)と書いて始め、完成した楽譜の最後に「SDG」(Soli Deo Gloria「神のみに栄光あれ」)と書いた。バッハの音楽はことごとくが神へ捧げられたものだった。

山村雅治

1986年11月に開館した芦屋の山村サロンは、能舞台の上にスタインウェイのピアノを置く、そして客席は寄木細工が敷き詰められた平場であり、その気になれば社交ダンスも宴席を設けることができる多目的な小ホールだった。能楽をはじめとする日本の伝統芸能と、私の好きなバロックから現代までの西洋音楽の会など、文化の各分野においての様々な催しが主催者の数だけ30年間にわたって展開されてきて、2016年8月末に幕を閉じた。



閉鎖後は「松山庵 (しょうざんあん)」で続行。

主宰 JSO Javatel Sound Operations
<https://jso-music.com>
メール:info@jso-music.com

